

国際地理学連合(IGU)地理教育委員会(CGGE)交流に尽くされた 高校地理教師 松村亮一先生を偲ぶ

志村 喬(上越教育大学)

2016年8月、山口県の高校で地理を永らく教えられていた松村亮一先生が逝去された。松村先生からは、国際地理教育研究を私が進めるにあたり、様々なご助言・ご支援をいただいた。この場でご逝去を悼むとともに、先生の果たされてきた役割を少しでも記録に残したく本稿を寄稿する。

松村先生のご経歴と教材交換

松村先生のご経歴を直接、正式に伺う機会はなかったが、ご著書等をもとに記すと次のようになる。

1936年山口県生まれ。山口大学教育学部卒業。山口県公立高等学校勤務(1997年3月下松高等学校(母校)定年退職)。この間、山口県高等学校社会科研究会地理部長。

このように松村先生は、山口県の高校地理教育研究・活動のまとめ役であられた。そして、私が最初に教示いただくのもその活動成果が縁であった。新潟地理フォーラム創刊号の特集『『地理学習帳』から地理教育を振り返る』の杉田(2005)、種村(2005)、西山(2005)にあるように、私を含む新潟県の若手地理教師らは新しい県版地理教材集を企画し、1989年に『新潟県高等学校地理学習帳』として刊行した。その過程で私は、各都道府県で作成されている県版地理教材を改訂参考のために集めており、山口県の高校地理研究会へも入手を試みていた。

その結果、山口県高等学校社会科研究会地理部会が1989年と1990年に刊行した『山口県地理資料集』が送られてきたが、その送り主こそが地理部長である松村先生だった。この地理資料集は、A3版30ページにわたる立派なもので、大きなサイズを利用した地形図掲載を主としているのが大きな特長であった。そして、教材には1991年9月4日付けで手紙も添えられていた。

「地理資料集を贈呈いたします。……先生方は大変協力的です。……成果物が在ることにより先生方の結びつき協力があり進歩があります。無ければつい時間が立ってしまうでしょう。また、受験のための地理になってしまうと思います。ご活躍の程祈念いたしています。」との文面は、やっと学習帳編集事務を終えた30歳の私にとって、とても励みになった。同時に現在読み返すと、今だからこそ大事にしなければいけないことが記されていると感じる。

松村先生との出会いー1992年8月2日 USA コロラド大学

お手紙をいただいた約一年後の1992年8月2日、アメリカ合衆国コロラド州ボルダー市のコロラド大学で、期せずして松村先生にお目にかかることとなった。コロラド大学で

は同日から国際地理学連合(IGU)の地理教育委員会(CGЕ)大会が開催されており、千葉県で高校教師を務めていた安藤清先生と二人で参加した¹⁾。初日の大会受付を済ませたところで「日本からの方ですか?」と声をかけて下さったのが松村先生だった。山口県からお手紙をいただいた先生と、コロラドでお目にかかるとは全く予想しておらず、大変驚いた。その後、三人でステーキハウスで夕食を取りながら、CGЕ大会初参加の私たちは、経験豊富な先生からCGЕについていろいろなことを教わった。中でも、大会後半の夕刻に開催されたバーベキューパーティの会場で、ロンドン大学IoE地理教育学教室のアシュレー・ケント先生が、遠くから松村先生にわざわざ近づいてきて国際調査のお礼を親しげに話される場に居合わせたことは、先生の幅広く深い国際交流に気づく瞬間であった。

松村先生のCGЕでの活動

IGU-CGEの活動には保柳睦美先生・正井泰夫先生はじめ創設期から日本の地理教育研究者は参画してきた(志村 2014)。しかし、学校現場の教師として自主的かつ活発に参画したのは、松村先生が最初ではないかと考えている。先生から伺った話では、きっかけは1980年の国際地理学連合(IGU)東京大会であったという。東京大会ではICA(国際地図学会大会)も開催され、池袋の高層ビルであるサンシャイン60で国際地図展示会が開かれていた。松村先生はまだ小さかったお嬢さんと展示会に参加したところ、地理教育委員会(CGЕ)常任メンバーのハウブリッヒ先生(西ドイツ・フライブルグ教育大学)と懇意となり、1984年のフライブルグ大会へ誘われ参加したという。その後、1986年のバルセロナ大会、1988年のブリスベン大会へとCGЕ大会に連続参加し、CGЕコレスポンドングメンバーも務め、下記のように活動の様子を現場教員向けに続々と発表された。

松村亮一(1985):フライブルグへの途I・II-国際地理教育者会議参加・雑感記. 地理月報(二宮書店), 331・332.

松村亮一(1987):題名不明. エリア山口(筆者未見)

松村亮一(1988):IGU地理教育シンポジウムとピレネー巡検. 地理・地図資料(帝国書院), 1988年4月号, pp.12-13.

松村亮一(1989):多民族国家 オーストラリアの昨今 人々の生活と日豪関係. 地理・地図資料(帝国書院), 1989年7月号, pp.12-13.

また、1984年のフライブルグ大会では、世界各国の子どもたち(10歳ぐらい)が、自分の暮らしを紹介する国際書籍出版が企画された。この中心はハウブリッヒ先生で、ねらいは子どもたちの国際理解の推進であり、22カ国の子どもたちが寄稿した書籍として、1987年に英語とドイツ語で出版された。

松村先生は、日本から唯一の協力者とし参画・明記されるとともに翻訳日本語版の出版に尽力され、1991年にその訳本、翌92年には続編が次の書籍で刊行された。

松村亮一・松本千里訳、岩本廣美協力(1991):『どんなくらしをしてるかな-世界の友

1)このコロラド大会の様子は、安藤(1992)、志村(1992, 1993)に記した。

だちが書いた自分の生活』古今書院.

ハウブリック, H. J 編, 松村 亮一・松本千里訳 (1992) : 『どんな国かな - 世界の友だちが書いた自分の国』古今書院.

『どんな暮らしをしてるかな-』に日本からは, 小学5年生である松村美欧さんが「ある日, 私達は広島に」という題名で, 社会科見学で下松市から広島市へ行ったことを書いている。マツダの自動車工場見学, 広島平和公園・平和記念館訪問, ビール工場見学, 宮島訪問の内容は, 日本の平和教育から子どもの日常生活(ビール工場箇所では, 「お父さんもビールは好きですが・・・」との文言がある)までが, 分かりやすく記されていて, 大人にも勉強になる。実際, 私がこの本を購入したのは, 高校地理授業で活用できると判断したからで, 松村先生と交流する前であった。

松村先生は, 本書あとがき「この本について 読者のみなさんへ」の最後を, 次のように結んでおり, 先生の子もたちの地理教育を通した国際理解への願いが伝わってくる。

「この本を読んでくれたみなさんが, 世界にはいろいろの多くの国があり, 国民がいて, 同じようなくらしをしている友達, ちがったくらしをしている友達, それもみな世界の地球の友達なのだとということがわかっていただければ, この本に関係された多くの先生方はきっと喜んでくださると思います。」(pp.146-147)

CGE 委員らとの深い交流

雑誌「地理」の1989年1月号は, 「国際舞台の地理学者 人と仕事」特集で, 8つのIGU委員会の紹介論文が掲載された。そのうちの1つはCGEであり, これを執筆されたのも松村先生であった。

松村亮一(1989): 地理教育国際会議報告と活躍する人々. 地理, 34(1), pp.32-39.

同論文の前半は, 1988年のCGEブリスベン大会及びCGE活動の紹介, 後半はCGEを代表する次の著名な地理教育研究者の紹介である。

グレース,N.(イギリス): 1972~1980年CGE委員長, ロンドン大学IoE

ストルトマン,J.(USA): 1980~1988年CGE委員長, ウェスタンミシガン大学

ハウブリック,H.(ドイツ): 1988~1986年CGE委員長, フライブルグ教育大学

ガーバー,R.(オーストラリア): 1996~2000年CGE委員長, クインズランド技術大学

この論文には, 各研究者の研究だけでなく経歴や趣味までも紹介されていて, 最初に読んだとき大変驚いた記憶がある。しかし, その後CGE大会へ参加し, これらの先生方とお目にかかると「マツムラは今回来ていますか?」「マツムラは元気ですか?」と聞かれる機会もあり, 研究を超え交流されていることが分かっていった。例えば, ストルトマン先生は訪日中, 機会があったときには松村先生にお電話等をしていたようである。松村先生は, 英語が大変ご堪能であったが, 気さくなお人柄と国際的センスが重なり, 深い交流が築かれたのだと思う。

松村先生との楽しい巡検

1992年のアメリカCGE大会(コロラド)以降、松村先生とは継続的に情報交換し、お会いすることになった。国際学会では、翌大会にあたる1996年のオランダのハーグで開催されたCGE大会である。この時も、昼の会議の終了後に安藤先生と三人で食事に行ったが、店員等へ熱心に聞き取り調査をされていたのをよく覚えている。

このような好奇心は海外だけではなく、日本国内でも同じであった。1990年代末、新潟県内へ友人グループで旅行においでになった時に連絡をいただき、新潟市内に当時住んでいた私が、単独で残られた松村先生をご案内したことがあった。大河津分水や燕の産業博物館を案内したが、どこでも時間をかけて見学するとともに、いろいろ質問され、乗車予定の上越新幹線燕三条駅へ間際にお送りしたような気がする。また、2001年に日本地理教育学会大会が上越教育大学で開催された時、私の実家に泊まっていた。その夜は私の父と夜まで親しく懇談、翌朝は小学生だった息子と周辺の田圃を散歩がてら観察されていた。先生は農家のお生まれで稲を栽培されていることもあって、我が家の農業の様子にも関心がおありで、その後の手紙や電話でも田植え・稲刈り時期の山口と新潟との違いなどが、しばしば話題になった。

一方、私が広島に用があったときには、ご自宅へ招かれた。山陽新幹線・新岩国駅まで迎えに来ていただき、子どもの頃から歩いてみたかった錦帯橋を案内していただいた。また、米軍岩国基地前へも行き、若い頃は岩国基地の人達と英語を勉強したとお聞きした。その晩は、ご自宅に泊めていただいたが、ロンドン大学のケント先生ご夫妻が以前おいでになり、「家の台所で奥さん達が一緒に、天ぷらを作りを楽しんだ。今でもケント先生が懐かしそうに言いますよ!」といったお話を、奥様を交えてお聞きしたときは驚いた。定年退職された先生は当時、私立中等学校で地理を教えておられた。翌日は、先生の授業に招かれ、雪国新潟の地理授業を急遽したことも忘れられない。

世界を巡り、日本の教育現場とCGEとの架け橋となられた松村先生

1997年5月、松村先生から定年退職のお手紙をいただいた。それには挨拶文に添えて、「松村亮一 海外渡航歴」と題された資料が「乞笑覧の程」と朱書きのうえ同封されていた。これには1969年の西ヨーロッパ訪問(全地研による夏期1ヶ月にわたる巡検)からはじまる全21回の渡航が記されており、そのほとんどが1週間を超える長期のものである。現在、日本の地理教師がCGE大会はじめ海外の学会・研究会・巡検へ参加することは希ではないが、当時これだけ海外へ行かれるのは大変なご苦労があったことであろう。

しかし、先生の活動の結果、私をはじめ日本の地理教育関係者が、CGEの多くの関係者と積極的に交流し共同研究できるような土台が築かれたのではないかと考える。まさに、松村先生は、世界を巡り、日本の教育現場とCGEとの架け橋であった。

先生からいただく年賀状には、1月から12月別に各月で思い出に残る事柄が簡潔に記されていた。そこには「新潟の友に会い、広い越後平野を体感する」「青春18切符で〇〇訪問」といったように巡検・旅行されている内容が多く、お元気にされていることがよく分かった。先生は地理的好奇心のかたまりで、それが日本・世界を巡り、最後に教室の楽しい授業として子どもたちに還元されていた。それは、子どもたちだけでなく、国際地

理教育研究を手がけ始めていた私にとっても同じである。

松村先生は、CGE 大会の場で私達を「彼らは私よりずっと若い。これからの日本の地理教育を担う人です。」と、参加者へしばしば紹介下さった。この言葉の有り難さは、いましみじみと感じている。

松村亮一先生，日本で世界で本当にお世話になりました。安らかにご永眠下さい。

追記：ご自宅訪問時はじめ，様々な場面で奥様にも大変お世話になった。末尾ですが，奥様に感謝申し上げます。

(2017.02.03 記)

文献 (松村亮一先生の著作部関係は本文中に掲載)

安藤 清 (1992) : IGU 地理教育シンポジウム参加報告. 房総地理, 43, pp.1-12.

志村 喬 (1992) : '92 年夏, コロラド体験記ー地理授業実践の資料としてー. 新潟県立新潟向陽高等学校研究紀要, 16, pp.23-42.

志村 喬 (1993) : IGU・CGE 主催の地理教育シンポジウムに関する資料ー 1992 年コロラド大学にてー. 新潟経済地理学会年報, 8, pp.24-38.

志村 喬 (2014) 国際地理学連合(IGU)の地理教育委員会(CGЕ)にみる地理教育研究潮流と日本. 人文地理, 66(2), pp.30-50.

杉田幸治 (2005) : 地理教師の一代記ー 38 年間の教員生活を振り返るー. 新潟地理フォーラム 2004 (第 1 号). pp.1-14.

種村盛牟 (2005) : 「ウソつき地理教師」の回想. 新潟地理フォーラム 2004 (第 1 号). pp.15-27.

西山耕一 (2005) : 新潟県地理学習帳の経緯. 新潟地理フォーラム 2004 (第 1 号). pp.29-36.